

短期高等教育機関における教育の現状と課題

—大学編入生へのインタビュー調査から—

PRESENT STATE OF EDUCATION AND ISSUES AT SHORT-TERM HIGHER EDUCATION INSTITUTIONS

—BASED ON INTERVIEWS WITH UNIVERSITY TRANSFER STUDENTS—

小形美樹

Miki OGATA

キーワード：大学編入生、短期高等教育、短期大学、専門学校、学生の評価

Key words : University transfer students, Short-term higher education, Junior college, Vocational school, Students' evaluation

要 旨

本稿では、四年制大学人文社会系学部3年次に編入した短期大学及び専門学校出身者に対するインタビュー調査から、短期高等教育機関における教育の現状と課題について報告する。編入生のほとんどが、短期高等教育機関は大学より教育管理体制は厳密であるものの教育内容は難易度が低いと感じていた。しかしながら、短期高等教育機関においては、少人数体制ゆえに教員との距離が近く、学生に対して行き届いた配慮がなされることが多く、この点が四年制大学にはない良さであると評価していた。

Abstract

This paper reports on the present state of education and issues at short-term higher education institutions based on interviews with students transferring from junior colleges or vocational schools to the third year of humanities or social science undergraduate degree programs at four-year universities. Most of the students felt that although short-term higher education institutions had stricter education management systems than universities, there was a lower degree of difficulty in terms of educational content. However, they also felt that short-term education institutions offered closer connections with instructors due to smaller class sizes as well as showed more attentive consideration for students, whereas four-year universities lacked these advantages.

1. はじめに

本稿の目的は、短期大学及び専門学校¹⁾という短期高等教育機関における教育の現状と課題について、短期高等教育機関から四年制大学人文社会系学部へと編入した学生（以下、編入生）の語りから検討することにある。その理由の1つは、編入生は編入元である短期高等教育機関と編入先である四年制大学の2つの学校種別において学生生活を経験しているため、両者を比較することが可能という点にある。もう1つは、人文社会系の学部や学科では、医療系専門職のような業務独占資格の取得などを最終目的とするわけではなく、教育成果がわかりにくい。よって、学業や学生生活に対する評価を学生の語りから分析して課題を明らかにすることは、今後の短期高等教育機関のあり方を探るうえで、必要な視座を教員に与えるものと思われたからである。

「平成30年度学校基本調査結果の概要（高等教育機関）」によれば、平成30年3月に短期大学（本科）卒業者のうち、「大学等への進学者」（進学し、かつ就職した者を含む）は、4,937人で全卒業者の9.0%であった²⁾。また、「平成28年度専修学校各種学校調査統計資料」によれば、平成28年3月に専門学校（中間部）を卒業した者のうち、2.4%が大学に進学している³⁾。そして、前掲の「平成30年度学校基本調査結果の概要（高等教育機関）」では、平成30年度の大学（学部）への編入学者数は、短期大学から3,925人（男子1,325人、女子2,600人）、専修学校（専門課程）から1,476人（男子776人、女子700人）であったことが報告されている。

以上の数字は、現在のところ、決して大きいものとは言えないが、今後、我が国においては少子高齢化により、生涯学習や職業訓練などの目的で学び直しが行われることは想像に難くない。その際、修業年限が短い短期高等教育機関が進学先として検討されることも考えられる。しかしながら、短期高等教育機関である短期大学数は、ピーク時の平成8年の596校から平成29年には337校に、専

修学校はピーク時の平成10年の3,573校から平成29年度には2,823校へと減少している⁴⁾。少子化により大学全入時代を迎えた受験生は、入学できる環境と能力があれば、四年制大学に進学する傾向にある。また、短期高等教育機関、特に教育成果が可視化しにくい人文社会系学科は、社会人が学び直しの場合として積極的な選択をするとはいえない。よって、短期高等教育機関は、改めて存在意義と役割を認識すべき立ち位置に置かれているといえよう。

なお、大学編入学を扱った研究には、編入学による学生の流動化に伴う教育の変化と問題を明らかにした吉川ら（2004）の研究、編入学試験問題について分析した森口（2012）らの研究、看護系大学の編入学制度について調査した福本ら（2008）の研究があるが、人文社会系学部への編入学者を対象として編入元と編入先の高等教育機関の比較を行った研究については、蓄積がほとんどない。

こうした背景から、編入生が編入元である短期高等教育機関と編入先である四年制大学（以下、大学）を比較し、短期高等教育機関に下した評価を分析し、教育内容やシステムに関する課題を捉えることは、今後の短期高等教育機関のあり方を検討していく一助となると思われる。

2. 大学・短期大学・専門学校

大学、短期大学、専門学校という学校種別による教育内容の違いを確認しておく。学校基本法にはそれぞれの学校の目的が示されているが、小林（2014）は、これらの相違について、以下のように整理し説明している。

大学と短期大学の学校教育法上の相違は、短期大学は、大学にはない「職業又は实际生活に必要な能力の育成」を目的とし、大学より職業教育の性格が強められている。また、短期大学は修業年限を2年または3年と規定されており、1年制や4年制課程は認められていないことも短期大学の大きな特徴である。専門学校（専修学校専門課程）の目的規定には「教養の向上を

図る」という規定が入っている。これは専門学校には専門分野として教養系があるためにおかれたものと思われるが、実際には、この教養系以外の専門学校の課程では教養教育はあまり行われていないとみられる。むしろ、短期大学では、暫定的な大学であるため、教養教育を行ってきたという特徴がある。⁵⁾

3. 調査の方法と概要

筆者は「大学編入学制度を利用した学生のキャリア指向」について明らかにするため、大学編入者（転学者も含む）に対して2017年8月～11月にかけて半構造化面接を実施した。この調査では、①高校卒業までの進路、②大学編入学という進路選択をした理由、③進路選択への親からの関与、④高校卒業から直接大学進学というルートではないことの是非、⑤専門学校や短期大学と四年制大学との学習の違い（該当者）、⑥編入生であることのメリット、デメリット等を中心に対象者に自由に語ってもらい、インタビュー内容はテキスト化したうえで、コーディングを行ってカテゴリーに分類し、項目ごとの比較を行ったり、関連性を整理したりした。なお、本研究は、筆者の所属機関である仙台青葉学院短期大学の研究倫理審査を受け、調査対象候補者に対して調査内容と個人情報取り扱いについて十分な説明をし、協力可の場合に同意書に署名をいただいたうえでインタビュー

を実施している。

本稿では、この調査データのうち、編入元が専門学校及び短期大学である者のデータを用いて、短期高等教育機関の現状と課題について検討する。対象者の内訳は、 α 専門学校、a 短大、b 短大の出身者がそれぞれ2名、c 短大が3名、d 大学短期大学部が1名⁶⁾であった（表1）。なお、FとLを除き短期高等教育機関と同系の学部学科⁷⁾に編入している。また、短期高等教育機関への入学が大学編入学試験の受験が目的だった者が4名、入学直後に編入制度があることを知ってすぐに編入試験受験を決意した者が1名、入学後の学びがきっかけで大学編入学に進路変更をした者が5名であった。

4. 短期高等教育機関に対する編入生の評価

まず、インタビューデータのうち、先述した⑤専門学校や短期大学と四年制大学との学習の違い（該当者）に関わる語りを中心にコーディングを行い、カテゴリーに分類した。その結果、短期高等教育機関に対する編入生の評価は、1. 教育内容、2. 学生と教員の距離、3. 教務システム、4. 学生の質という4つのカテゴリーに分類され、1. 教育内容についてはさらに、①授業の難易度、②教育の特徴、③授業形態、④教育方針のサブカテゴリーに分類された（表2）。以下、具体的な評価について学生の語りから分析していく。

表1 対象者一覧

記号	編入元学校種別	編入学受験決定時期	編入先大学名	学年	性別
A	α 専門学校	入学直後	国立A大	4年	男
F	α 専門学校	編入元で学んでから	国立B大	4年	男
G	a 短大	編入元で学んでから	国立B大	4年	女
H	a 短大	入学前	国立B大	4年	女
I	b 短大	入学前	国立B大	4年	男
J	b 短大	入学前	国立B大	4年	男
K	c 短大	入学前	私立C大	4年	女
L	c 短大	編入元で学んでから	私立D大	4年	女
M	c 短大	編入元で学んでから	私立E大	3年	男
N	d 大学短期大学部	編入元で学んでから	私立E大	3年	女

表2 四年制大学及び短期高等教育機関に対する編入生の評価

評価項目		具体的評価	語り手
1. 教育内容	①授業の難易度	大学の方が難易度が高く学びが深い	G,H,I,J,K,L,N
		短大も大学も難易度は変わらない	M
		教員によっては短大のほうがレベルが高い	K
		専門学校で大学レベルの授業内容が学べた	A
	②教育の特徴	学年ごとにレベルが上がる	G
		考える機会とプレゼンが多い	A
		ビジネス系の科目が学べる	A,K,L
		短大では実務を学ぶ、大学では学問を学ぶ	N
	③授業形態	大学ではグループ学習が充実	A,J,L
		大学の講義は聞いているだけ	A,L
④教育方針	専門学校は強制的、大学は自主的な学習	F	
2. 学生と教員の距離		教員との距離が近い	G,H,I,L,N
3. 教務システム	大学は事務局が不親切	K,N	
	大学はすべての情報を個人で管理	N	
	大学は出欠管理が甘い	M	
	短期高等教育機関は出欠管理が厳重	F, M	
	短大は欠席の救済措置があったが、大学の出欠は自己責任	I	
4. 学生の質	短大にはやる気のない真面目でない学生が多い	G,I	
	大学の学生はちゃんとやってくる	H	
	短大では楽に単位をとって卒業できればという学生も多い	H,I	
	周囲の学生の成績や意識が高い	A,F	

4.1 教育内容

4.1.1 授業の難易度

授業の難易度は、短大出身者8名のうち7名が、「大学のほうが難易度が高く学びが深い」という判断を下しており、大学における学びにおいては、事前事後にかなりの学習量が求められ、自らの考えを整理したり、深く理解したりすることが必要であるとしている。一方、短大の学びは浅く簡単であると感じたことが、以下のような語りをもって説明された⁸⁾。

「正直、短大での勉強は楽でした。はっきり言うと」(K)

「短大ん時はゼミがあって、卒業論文もそこそこ本を頑張ってまとめて、みたいな。で、自分の考え、ちょっと言うぐらいだったし、ゼミも、ほんと遊びみたいな感じだったので。授業で『X』(専門文献名)を、大学でも短大でもやってるんですけど、そのや

り方が全然、難易度が違って。短大はちょっと分からない単語があったら、みんなで調べよう、ぐらいな感じなんですけど。だから、自分の個人的な発表も1日あればとりあえずできる感じなんですけど、大学の発表は、すごい発表のレジュメを10枚以上作らなきゃいけないのと。あと、所要時間がほんとに2週間ないと、ほんとにやっていけない」(G)

「短大だと、(試験は)ほんとに持ち込み可だとかなり簡単なんですけど、四大だと、持ち込み可であればあるほど難しかったりしますね。(短大は)持ち込みするやつに全部メモとけば、その中に答えあるみたいな感じだったんで。ただ、四大だと、その持ち込んだやつがヒントになるくらいで、自分でやっぱり考えないといけなかったりとか、ありますね」(J)

「大学でしかこれは学べないことなのかなっていうのもあります。やっぱり制度だったり、そういう部分は、短大はあんまり深く学んでこなかったんで。制度とかもすごい理解が必要だと思うんで」(N)

そして、大学の方が難易度が高いという編入生の感覚は、2年生と3年生といった学年の差からもたらされるものではないことが、下記のように語られている。

「(短大は)『多分これ、大学に出したら、あんまりいい成績じゃないだろうな』みたいなのも、単位はくれるし。(中略) やっぱ就職する子も多いんで、とりあえず多分、言っちゃ悪いんだけど、卒業させていうのが前提だと思うんで、やっぱ緩い。(中略) 大学の演習っていったら、当たり前なんですけど、レジュメも作って、みんなの前でちゃんと発表して、時間内に発表するみたいなのがあったんで、そのギャップは、やっぱ四年大、違うな」(H)

また、1名ずつではあったが、教員によっては短大のほうがレベルの高い授業を提供していること、短大も大学も難易度は変わらないと感じたことを述べた編入生もいた。ただ、前者については、「大学ではどうしても幅広くなので、やる人はやるんです」(K)と大学全体としては短大より難易度が高めであることを認めただうえで、教員個人の資質と能力を評価した発言であったし、後者については編入先大学での教員の指導や教務システムが甘めであること(後述)が影響していることが窺われる発言であった。

「(〇〇学は、) 変わんないどころか、短大の先生の方が専門的でした、正直」(K)

「大してそんなに(変わらない)」(M)

一方、専門学校出身者1名は大学レベルの授業であったと述べているが、所属していた学科がその専門学校の中で2番目に厳しいと言われる学科であり、また、専門学校全体として大学編入生を多く輩出していたため、大学寄りの授業展開が取り入れられていたことがその背景にある。

「特に2年生からやるビジネス研究というのがすごく厳しくて、ほぼ大学の卒論で書く論文とレベル

の同じものを書かされるものなんですけど、その卒論がグループになったっていうようなやつですね。(中略) 国立A大とかだとちょっと別ですけど、普通の都内のそこら辺の私立よりかは、相当レベルが高い授業やったと思います」(A)

なお、今回の対象者の進学先は、国立大学6名、私立大学4名であるが、国立大学に進学した6名と私立大学に進学した者のうち1名は、出身高校が進学校(自称進学校も含む)⁹⁾であったし、全員が出身校より偏差値の高い大学へと編入している。また、a短大とb短大は公立の短期大学で、全員がセンター試験の受験後に一般の筆記試験で合格していた。よって、彼・彼女らが短期高等教育機関での学習を楽しんだというのは、しっかりとした基礎学力が備わっていたからとも考察される。また、一般に短期高等教育機関は大学に比べて偏差値が低いことが多く、多数を占める学生のレベルに合わせて、授業内容を浅く簡単にせざるを得ないことを鑑みれば、彼・彼女らの判断は妥当だと言えよう。

4.1.2 教育の特徴

短期高等教育機関と四年制大学の教育の特徴については、編入生は以下のような見方をしていた。編入生が捉えた短期高等教育機関と大学の教育の特徴を簡単に述べると、短期高等教育機関では、ビジネス系の科目や実務を学ぶことができ、大学では段階を踏んで学問を究めていくということである。

「ビジネス関係のマナーとか、礼儀とか、そういうのを最初に身につけておくことができたので、結構いろんな場所に行っても、『すごく礼儀正しいね』とかって言われるようになりまして」(L)

「短大行かなかつたら知らなかった資格もあるので。秘書検なんかは知ってたんですけど、短大入る前から、親が持ってるので。でも、準1級まで取ろうなんて思わなかったと思いますし。(中略) 簿記とかも、授業でやってたおかげですんなり取れたので」(K)

「1分間スピーチみたいなのをやりましたね。あとは簿記、やりました」(A)

「あと短大は、すごい専門的な科目(職業に直結する科目)ばかり、ひたすらそれしかやってない。(中略)そういうことについて、ひたすらやってるっていう感じだったんですけど、大学に入って、何て言うか、学問的っていうか、すごい広い分野になったっていうのもあるし、大人数になったっていうのもあって、あと、結構入ってみて、難しい言葉がいっぱい出てくるなって思いました」(N)

「3年生ん時は、やっぱ初めてなので、演習って、そのゼミみたいなものが2年生から始まるんですけど、私は3年生で初めてやって、2年生で初めて入ってきた子とほんと同じように、ちょっと優しく教えてくれたりしたんですけど。やっぱ4年生になるので、結構、難易度が上がってきて、何かすごい難しいこと聞かれたりとかするようになったので、もっと学年を経るにつれて、レベルが上がってってるのがすごい分かりました」(G)

4.1.3 授業形態

授業形態については、大学の講義は聞いているだけだという一般的な認識と同じ感想をもった編入生もいたが、短期高等教育機関と四年制大学での相違ではなく、所属していた編入元の学生数や教育内容による相違であった。今回対象となった短期大学は4校あり、そのうちC短大出身者(L)は短期大学のほうが座学が多かったと話しているが、所属学科の学生数が100名を超えており、講義形式が多かったためであろう。また、大学では他学部の学生との共同作業が充実していたことを評価する声もあった。

「大学の講義はひたすら先生がしゃべって、学生は聴いてっていうそのシステムにちょっと、なんかがっかりしちゃって」(A)

「(大学でも一部科目については)聞いているだけっていうことが多かった。(中略)なんか実際にグループ活動でいろんなことをするとか、そういうのが多いっていうのは、『四年制大学らしいんじゃないかな』って思ったりとか。あと、なんででしょうね。あとは、短大とかだと何となく、座学の方が、講義とかが(多かった)」(L)

「1年生の科目になるんですけど、他の学部と交流して共同作業するみたいな(授業があった)。それが、四大の方が多くなって思ったんですよね。(中略)それが四大はしっかりしてるっていうか、充実してるっていうか」(J)

4.1.4 教育方針

教育方針については、短期大学出身者からの語りは得られなかったが、専門学校出身者が下記のような指摘をしている。昨今、短期大学や大学でも学生に対する管理体制が中学校や高等学校並みに厳しくなっている様子が見受けられるが、実はそれは、学生から自発的に行動する力を削ぐことにつながりかねないということを彼の語りは指摘している。

「専門(学校)はやっぱ強制的な勉強ですよ。普通にこう、出欠席がちゃんとあって、これ、出席が足りないと自動的に落ちるとか、割と強制的に勉強させられるとこで。大学は全くそういうのがなくて、もうほんとに、勉強しなかったら落ちるだけだし、勉強は自分でするものだからっていう感じで。そこが一番違いますね。最初は結構慣れなくて、(中略)これはだめだなと思って勉強するようになってっていう意味では、大学の方がやっぱ厳しいなっていう。表面的に見るとやっぱ専門とかの方が厳しいんですよ。やっぱり授業しっかり出るとか、こんだけ勉強しないとだめとか、あるんですけど、実際、社会出ないんで分かんないんですけど、実際、社会出たら、多分、人から言われるっていうよりも自分で動かないとだめだと思うんで、そういうのが大学にはあるかな」(F)

4.2 学生と教員の距離

短期大学出身者は、短期大学の良さとして「教員との距離が近い」ことを評価していた。一般的に短期大学は大学より学生数が少なく、講義の履修者数も教員の目の届く範囲であることが多い。そのため、個々の学生への行き届いた配慮や受講者と双方向のやり取りが行いやすく「アットホーム」な組織になりやすい利点があるのだろう。一方、大学の教員は近寄り難い存在であるとされ、

簡単に相談などはできない雰囲気であったことが示された。

「『先生、今日いますか』みたいなとかでメールしたり、『編入の試験のあれ、見てください』とかかって感じで、先生もすごいアットホームだったんですけど。やっぱ大学の先生は、ちょっと最初、近寄りたくて」(G)

「短大の方が人情味が強いってというか、人が少ないんで、先生もみんな顔を覚えるじゃないですか」(I)

「短大は、もう担任みたいな感じで、先生が3人いて、(学科の人数が)25人の中で先生が、25人が3つに分かれてゼミがあって、それですごい、何だろう、一人一人に目が向いてたんで、結構、信頼関係というか築けるんですけど、大学って結構先生も多いし、生徒も多いしで、もう何が何だか全然分かんなくて、誰に言ったらいいのかとか、誰に相談したらいいのかとか、そういうのも結構分からないってというか」(N)

「短大の時は、すっかすかかっていうか、ほんとに二三十人いるかなぐらいで、多くても、1年生の簡単な授業みたいな時は多いかもしれないんですけど、普通のこういう〇〇系の授業って、あんまり人いなかったんで、結構問いかけてかしてくる人(教員)はいましたね」(I)

4.3 教務システム

事務局の対応、情報提供、出欠管理の方法などの教務システムについては、短期高等教育機関の方が嚴重ではあっても人情味のある対応をしており、大学は出欠管理が甘く、学生個人がすべての情報を自己責任で管理をしなければならないことが報告された。さらに、大学の事務局の対応が不親切であることに不満を述べる編入生もいた。

「短大は、学生証で読み込ませて出席取るじゃないですか。でも四年大は出席カードで書けばいいですよ、名前を。日付と。で、それを授業の最後に出すみたいな感じなんです。でも、学生証って、なんか、ずるできないじゃないですか。あんまり。出席カードは代筆できるんで、誰かが書けば授業に出なくてもいい。(中略)『全く出席しなくていいか

ら』みたいな、『テストで100点取れよ』みたいな、言う先生もいて」(M)

「(大学は)もう個人単位じゃないですか、ほとんど。短大が、もう本当にクラスみたいな感じっていうのがあって、だから、『今週、何々あるよね』とかそういう情報共有とか、結構、説明会とかそういうのできてたんですけど、今、もう個人で確認して」(N)

「(短大は)結構休んでる人とかいると、救済措置じゃないんですけど、テスト受けられなかった、風邪引いたりした人は、『そのあと補習やるよ』みたいな。大学は、ないんですよ、そういうのは」(I)

「(大学の事務局は)冷ためな感じなんで、だから聞くのも怖いじゃないですか。あんまり聞きたくないというか、そんな対応されるんなら聞きたくないみたいな感じなんで」(N)

「(大学の事務局から)ちゃんとした説明も受けずに履修登録させられて」(K)

4.4 学生の質

学生の質については、大学の学生が課題等をきちんとこなすなど学習姿勢が確立しているのに対し、短大の学生の中には不真面目で学習意欲のない者がいることに対する不満が述べられた。一方、専門学校出身者2名は上位クラスに所属していたことから、同級生のレベルが高く刺激を受けたことを語っている。短期高等教育機関では修業年限が短いため、入学時に目標が定まっていない場合、意欲をもって学習に取り組むのはなかなか難しいのであろう。

「短大なんで、偏差値もあんまり高くないので、結構、柄悪いって言っちゃあれですけど、な人も多いんですよ。で、あんまり真面目じゃないってというか」(I)

「何か、ゼミで見ると、発表とかもすごい、やってこないってというか、やる気がない子だったなって思います。すごい多くて、ゼミでそういう子が」(G)

「(大学は)周りがみんなちゃんとやってくるから」(H)

「隣の学科の友達が TOEIC を受けていて、そいつは650取ってたんですよ。『まじか、こいつ』みたい

な、『俺、全然だめじゃん』みたいな、ていうので1回心折られたっていうか。これ、頑張らないといけないみたいな」(A)

「(専門学校の上位クラスは)周りの意識がすごい高いとか、やんなきゃいけないみたいな、あった」(F)

4.5 短期高等教育機関に対する編入生の評価

以上のように、「教育内容」や「学生の質」については評価が低いのだが、だからといって、短期高等教育機関の評価が低いわけではなく、編入生たちは短期高等教育機関に所属していたことに満足していた。それは「学生と教員の距離」の近さや少人数制から可能であるアットホームな人間関係、学生個人々人への手厚いサポートなどが、学生生活の満足要因になったからであろう。

「(短大の支援センターの職員は)編入にも就職と同じくらい力いれてくれるんで。(中略)(大学の)思い出ある?って言われたら、ない。短大の方が恋しい。いまだに会います、その(短大の)友達と。短大、すごい好きなんで」(H)

「(先生との距離が)なんかすごく近いなあって感じました。なんかいろいろ、やっぱ先生にもサポートしてもらったりとか、すごく、ほんとに助かった」(L)

また、大学編入学という進路が早いうちから明確であったり、編入元における学びがきっかけとなって大学に進学したいという意識が高まったりしたことで、短期高等教育機関での学生生活を有意義に感じたことも影響していると思われる。

5. 短期高等教育機関の課題

5.1 短期大学の課題

以上のように編入生の語りを分析していくと、短期大学では、①少人数制(ゼミや担任制)の実現、②学生のレベルに合った教育体制の確立、③実務と学問のバランスが取れたカリキュラムの提供の3点が課題であることがわかる。

まず、①については、教員採用という人件費が

発生するため、経営状況の芳しくない短期大学においては、実現が難しい面もあろう。しかしながら、昨今は、大学受験予備校等が受験生向けに「教員1人当たりの学生数(ST比)」が面倒見の良い大学を探す指標の1つであると紹介しており¹⁰⁾、四年制大学より劣っている場合は、短期大学の良さとして少人数制をPRすることができなくなるので、検討が必要であろう。

次に②であるが、短期高等教育機関の学生はさまざまな事情を抱えて入学することが多く、経済的事情から学力があっても四年制大学に進学に叶わなかった者と、学力不足でも入れる学校として短期高等教育機関を選択した者との基礎学力の差は大きい。しかし、授業は一般的に、学生の中間層に合わせて行わなければならない。その結果、上位層には物足りない、下位層には難しくついていけないという状況になりがちである。さらに、上位層、中間層、下位層の構成比が正規分布を示さないことも多く、学生のレベルに合った教育体制を確立することは難しい。

③については、昨今、短期大学では学問の比重を低くする傾向があるが、見直しが必要であろう。小林(2014)は、「高校生や保護者などから見た場合に、短期大学は大学なのか専門学校なのか、曖昧性は残ることが問題である」としており、「短期大学は専門学校に比べて質保証には強みがあるのであるから学外に対してより積極的に短期大学の教育を説明していくことが求められる」とも述べている。小林はさらに、短期大学の教員は「日本では大学として、博士レベルが多いと見られ、教員の水準は高いと考えられる」とも指摘している¹¹⁾。よって、専門学校や大学との差別化を図るには、実務に偏った教育でも学問に偏った教育でもなく、両方をバランスよく提供できることが求められよう。

5.2 専門学校の課題

一方、専門学校については、対象者が同じ専門学校出身の編入生2名のみであったために断言することはできないが、①学生に目標をきちんと定

めさせたいという指導、②習熟度別と興味別のクラス編成などが課題と考えられる。

①については、学生によっては賛否両論あろうが、編入生の語りにあったように、これまでのように、厳重な出欠管理のもとで強制的な勉強が必要かもしれない。しかしながら、昨今はスパルタ系の指導を嫌う学生もいるので、学生の多様性に合わせた指導法を工夫していかないと学生の入学が見込めなくなることもありうる。そして、大学編入学を希望するような意識の高い学生に対しては、資格試験取得一辺倒の指導は通用しないことが考えられ、語りにあったように大学での学びを先取りするような授業展開を行うことが効果的だと思われる。

また、②については、学生数が多い専門学校では細分化しやすいであろうが、習熟度別クラスの編成ができないような少人数であれば、実現は不可能である。よって、地方の小規模の専門学校の場合は、学生の確保が一番の課題となろう。

5.3 四年制大学・短期大学・専門学校の教育スタイルと立ち位置

Hersey & Blanchard (1977) が提唱したリーダーシップ論に、部下の成熟度によって効果的なリーダーシップが異なるという SL 理論 (Situational Leadership Theory) がある。この理論では、部下の成熟度レベルによって、有効なリーダーシップを「教示的リーダーシップ」(部下の成熟度が低い場合は、具体的に指示し事細かに監督する)、「説得的リーダーシップ」(部下が成熟度を高めてきた場合は、こちらの考えを説明し、疑問に答える)、「参加的リーダーシップ」(さらに部下の成熟度が高まった場合は、考えを合わせて決められるように仕向ける)、「委任的リーダーシップ」(部下が完全に自律性を高めてきた場合は、仕事遂行の責任をゆだねる) という 4 象限に分けている。¹²⁾

編入生の語りからは、高等教育機関は学校種別により、あたかも SL 理論のように学生の成熟度に合わせて教育方針やシステムを適応させている

ことが考察された。図1は、筆者が、編入生の語りから学校種別ごとの教育システムを、SL 理論に当てはめれば、どの象限にあるかを作図したものである。編入生の語りからは、大学は学生本人の自己責任を重視する委任的、専門学校は事細かな監督をする教示的、短期大学はその中間の説得的なリーダーシップで学生指導を行う教育システムを採用していることが窺われる。これらの教育システムには優劣があるわけではなく、入学する学生の成熟度や教授するカリキュラムの内容、学校の教育方針などにより、決まっていくものであろう。また、入学する学生が自分の成熟度を認識していれば、管理が厳しい学校で教育を受けて自分を成長させるという選択をすることもあれば、自分が興味のある学問について自由に探究するタイプの学校を選択することもできよう。

短期高等教育機関の選択にあたっては、保護者も教員も専門学校よりも短期大学を勧める傾向があるが、本人の性格や成熟度と、短期高等教育機関の教育スタイルのマッチングが重要と思われ、短期高等教育機関側も入学生選抜にあたり、この点を考慮しておく必要がある。

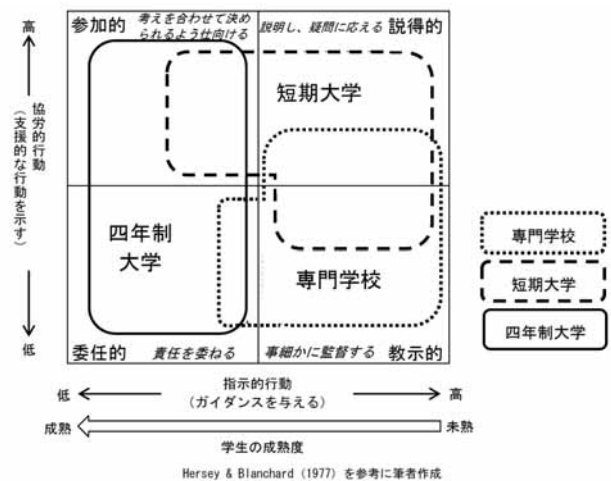


図1 編入生の語りから捉えた学校種別による教育スタイル

6. おわりに

本稿では、編入生の視点から、現在の短期高等教育機関の教育内容や教務システム等について検

討し、有効に機能する短期高等教育機関のあり方を考察することができた。しかし、短期高等教育機関には、ほぼ全入に近い学校も存在する。そこに集う学生の全てが編入生のような学びを求めるといえば、そうではあるまい。学習習慣が身につけていなかった学生の多くは、各種検定試験などのわかりやすい指標が示される科目や授業展開を支持する傾向もある。葛城（2015）は、「受験すれば必ず合格するような大学、すなわち、事実上の全入状態にある大学」を「ボーダーフリー大学」と定義し、「SPI や専門分野に関連する各種資格に近寄るほどに、ボーダーフリー大学および当該大学教員には、『大学とはなにか』という根源的な問いに対する回答の用意が求められることになる」¹³⁾と述べているが、短期高等教育機関の教員として、本来あるべき高等教育の姿と学生が求める短期で結果の出る教育とのはざままで苦悩しているのが現状である。

しかしながら、短期高等教育機関の教員は、短期大学であれ専門学校であれ、それぞれの学校種別の強みを活かした教育を提供していかなければならない。そして、今後、編入生や社会人入学生が増えてくることを想定すれば、教員同士が学校種別を越えて情報交換をし、教育力を高めていく必要がある。このような教員の自助努力は、短期大学と専門学校の共存共栄、そして、学生に多様なキャリアを提示することにつながるであろう。

謝 辞

本研究は、仙台青葉学院短期大学学長裁量研究費（採択No.2911）の助成を受けた。また、調査にあたっては編入学生の皆様に多忙な中、ご協力をいただいた。関係各位に心より御礼申し上げます。

【注・引用文献】

- 1) 正確には、「専修学校（専門課程）」であるが、一般的に「専門学校」と呼ばれており、学生も語りの中で「専門」と略して表現することも多いため、本稿では「専門学校」と記載する。
- 2) 文部科学省（2018）『平成30年度学校基本調

査結果の概要（高等教育機関）』

- 3) 公益社団法人東京都専修学校各種学校協会・公益財団法人東京都私学財団（2016）『平成28年度専修学校各種学校調査統計資料』執筆時、専修学校から大学への進学に関する数字が記載されている資料は上記が最新であった。
- 4) 前掲3)
- 5) 小林雅之（2014）「短期高等教育機関としての短期大学の役割の再考」『リクルートカレッジマネジメント』32（3）、6-13、リクルートホールディングス
- 6) 「大学編入学制度を利用した学生のキャリア指向」調査においては、四年制大学から四年制大学への転入者5名も含んだ15名を対象としており、編入先大学別の内訳はA大学5名、B大学5名、C大学1名、D大学1名、E大学3名であった。この理由は、国立A大と国立B大学の学部は毎年度編入学試験を実施して20名程度の編入生を定期的に受け入れているのに対し、私立の3大学については、編入学試験の制度はあるものの定員が少なく、また、年度によっては受験者もないため、国立A大や国立B大のようにまとまった調査対象者数を確保することができなかったためである。
- 7) 高等教育機関人文社会系の学部学科名は特殊なものもあり、詳細に記載すると容易に大学名や編入生の個人名が特定される懸念があるため、詳述は避けている。
- 8) 必要に応じて括弧内に筆者が文言を補足している。また、固有名詞については、研究の意図を損なわない範囲で言い換えや記号表記を行っている。
- 9) 編入生たちの多くは、一般に難易度の高い大学に進学している生徒が多い学校を「進学校」、ほとんどの生徒が四年制大学に進学しているような学校を「自称進学校」と使い分けていた。「進学校」は偏差値70以上で「自称進学校」は偏差値60くらいと表現した者もいれば、偏差値55で「自称進学校」と表現している者もいた。
- 10) 例えば、河合塾では、『Kawaijuku

Guideline 2018.4・5』で、「教員一人当たりの学生数」(S T比)について、「大学が学生に対して、きめ細かい教育をどれだけ提供できるかを表す指標として、注目が集まっている」と紹介している。

11) 前掲5)

12) Hersey, P., & Blanchard, K. H. (1977) Management of organizational behavior: Utilizing human resources, 3rd ed, Prentice-Hall. (山本成二・山本あづさ約, 2000『行動科学の展開—人的資源の活用: 入門から応用へ新版』生産性出版)

13) 葛城浩一 (2015) 「ボーダーフリー大学生が学習面で抱えている問題▶実態と克服の途」居神浩編著『ノンエリートのためのキャリア教育論—適応と抵抗そして承認と参加—』法律文化社

【参考文献】

吉川裕美子・濱中義隆・林未央・小林雅之 (2004) 「学生の流動化と学士課程教育—全国大学調査にみる編入学、単位認定、学生交流と支援体制の実態—」『学位研究』, 18, 3-104

森口博文 (2012) 「大学編入学試験問題と応用数学」『岐阜工業高等施文学校紀要』(47), 77-80

福本ら (2008) 「看護系大学の編入学制度等に関する調査結果の報告」『京都府立医科大学看護学科紀要』17, 119-128, 2008-03-15